

# 宮陵会報

# Kyu-Ryo

2013・12

## No.97

発行責任者  
一般社団法人  
神奈川大学宮陵会  
広報委員会

〒221-0802  
横浜市神奈川区六角橋3-27-1  
神奈川大学内  
TEL 045-481-5661  
(内線 2451~3)  
FAX 045-413-0791  
印刷所 株式会社 江森印刷所

なつかしい恩師・友に会おう!

## 第19回 ホームカミングデー開催



▲大友隆雄さん(32経卒)卓球部OB会(卓友会)ご夫婦と永峯暉夫さん(30経卒)水泳部OB会(菊泳会)ご夫婦

▼特別出演の福岡宮陵会「神奈川大学福岡応援隊」の皆さん KUフェイスメイクの応援隊に囲まれた笑顔の石積勝学長



▲菊地絵理さん(H9短商卒)、橘明美さん(H11英卒)馬渡崇さん(H11経卒)大空を飛ぶパラグライダー同好会の皆さんとKANちゃん



▲高柳由樹副会長(53経卒)中村久仁茂会長(48法卒)と花島幸子女性部長(40短商卒)静岡西部宮陵会の皆さん 浜松から参加

▼小島明弘さん、三浦千明さん、三田幸恵さん、黒崎亜紀さんたち(H17年経卒)池上和夫ゼミの皆さん楽しかったから今年も参加



▲山口博史さん(H18機博前)ご夫婦と加藤裕哉さん(H18機博前)ご夫婦



▲左から 畑中榮さん(45工経卒)、浅野博之会長(43賀卒)、神農太郎さん(38経卒)石巻から参加、小林保博さん(37電卒)、佐藤孝年さん(55経卒)、前日箱根保養所に宿泊後参加の宮城県宮陵会の皆さん

▼左から 陸井隆生さん(41経卒)、吉村蒨子副会長(40応化卒)、千葉清司さん(46賀卒)、ソフトテニス部OBの皆さん 兵庫県から参加 この後、箱根保養所へ泊りしてテニスを楽しむ計画



▲宮陵会長と三十路宮陵会(30年卒の同期会)の皆さん円卓を囲んで この後20号館で総会です

### Contents No.97

宮陵会新理事紹介.....	2
本部だより・地域組織紹介.....	3
準会員ニュース.....	4
東京箱根間往復大学駅伝競走予選会応援記.....	5
神大フェスタ・平塚祭報告.....	6
宮陵会委員会紹介.....	7
大学ニュース.....	8

青春時代を過ごした仲間と会える、そして恩師との再会もまた楽しいひと時。おかえりなさい母校へ、恒例の第19回神奈川大学ホームカミングデーが10月20日(日)正午から横浜キャンパス体育館で開催されました。

生憎の雨にもかかわらず約800名の卒業生と家族が集い、会場はここらの暖まるほのぼのとした熱気に包まれました。

おかえりなさい! ようこそ母校へ!

# 宮陵会 本部 NEWS

## 新理事就任挨拶

平成25年6月15日に開催された、一般社団法人への移行後初の定時総会において、次の4氏が新たに理事に就任されました。

### 久保清治



この度新しく理事に就任した久保です。昭和43年経・貿(原ゼミ)卒、昭和50年経済学研究科博士課程修了後、横浜商科大学で教員をしております。年老いてきたせいか、長い期間、籍を置いた母校の大学時代に想いが募っております。同窓会(宮陵会)の一役員として、母校・神奈川大学の発展に微力ながら役立ちたいと思っております。

ご存知のとおり、18才人口の減少とともに、わが国の大学は非常に厳しい状況に置かれております。この苦難の道乗り越えるには、現在勤務されている教職員の努力はもろろんのこと、卒業生も一丸となって努力・支援していくことが重要と考えております。新米理事として、まずは宮陵会の歴史や役割を学びながら、苦勞・尽力されてきた執行部の活動を補佐し、どのようにしたら母校や同窓会が発展できるのかを探り、結果を出していきたいと思っております。

### 中野健一



この度、理事に就任しました昭和45年経済学科卒の中野健一です。宜しくお願い申し上げます。

私の学生時代は、原司郎先生という偉大な恩師に恵まれ、徹底したスパルタ教育により、学問はもとより人間として、社会人としての生き方を厳しく鍛えられました。原先生の教え・原ゼミで学んだことの全てが、その後の人生に大きく影響し、今でも自分自身の精神的な拠り所であり、心の支えとなっております。

私は、富山県宇奈月町の出身ですが、原先生のお蔭で横浜銀行に入行することができました。いわば、神奈川大学のお膝元である横浜の地に生涯の職を得たわけで、卒業後も、公私にわたり母校との縁が深まることになりました。とりわけ、六角橋支店在職時は、母校の役職者の方、先生方に多大なご支援をいただきと同時に、大変お世話になりました。

こうした経緯から、母校への思いは、人一倍強いものがあると自負しており、比較的若い頃から、宮陵会との関わりを持たせていただき、これまでの職域・同好支部組織単位では、自分なりの役割を果たしてきたつもりです。

今般、理事に就任しましたこの機に、改めて、宮陵会としての目的達成のため、学生が「大学への思い」、卒業生が「神大卒業としての誇り」を持てるような大学にするにはどうすればよいかを真剣に考え、発言することで、微力ではありますが、神奈川大学と神奈川大学宮陵会の発展に向け努力

したいと思えます。どうか、会員の皆様のご指導と、ご支援・ご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

### 手塚 正



この度新しく宮陵会の理事を拝命いたしました昭和60年英語英文学科卒業の手塚 正でございます。事業委員会副委員長 体育振興担当

をさせていただきます。卒業後の本学との関わりは平成2年大学・社会人と続けたアメリカンフットボール部の監督に就任してからです。

当時まだ指導者として右も左もわからぬ27歳でしたのでアメリカンフットボールの知識はもとより他競技の指導者や組織運営・リーダーシップ等のあらゆる本を読み漁り、学生の貴重な四年間を預けるにふさわしい人間になるべく必死でもがいていたのを思い出します。それから10年間監督を続けさせていただきました。その間当時の宮陵会体育振興委員長である柔道部木村総監督から体育振興委員長に、また数年後には副委員長、そして平成14年には委員長への就任要請がありお引き受けいたしました。

委員長就任後体育会総会・リーダーズキャンプ等恒例行事への出席に加え、世間の人から「神大と言えば駅伝」と呼ばれるが若干停滞気味だった箱根駅伝の予選会・本選応援体制の立て直しを始めました。当初は神大の幅もばらばらにちらほらとテレビに映る程度でしたが今現在は神大のお膝元である東神奈川・横浜間の2kmに渡る重点集中応援をはじめ各拠点に人員を配置することで諸先輩からお褒めのお言葉をいただけるまでの応援体制に成長いたしました。これもひとえに神大を愛し応援の主旨をご理解しご活動いただいている各地区宮陵会会員の皆様、教職員の皆様、学生の皆様ご父母様及び近隣の皆様のご尽力のお蔭と強く感じしております。この体制を基に各都府県OB・現役との連携もできつつあります。

これからも原点である体育会を盛り上げ、ひいては神大を盛り上げる活動を基軸に体育会であるか否かに関わらず諸先輩から学生に渡る神大を愛する皆様の魂一つにして、世代間の架け橋となるべく理事として行動していく所存でございます。若輩者ではございますがこれからもご指導・ご支援のほどよろしくお願いいたします。

### 赤井昭二



これまで学内宮陵会(旧学内校友会支部)の会長として宮陵会に關わってきましたが、2013年4月の一般社団法人への移行とともに

新生宮陵会の理事に就任いたしました。私は、博士後期課程までの9年間、神奈川大学に在学し、そのまま工学部助手に着任、現在は准教授として後進の指導に当たっております。宮陵会では、主に準会員(在学生)に係る事業委員として会の発展に努力して参りたいと思っております。

狩野会長も前96号の会報で述べておりますが今後の目標の一つは、「宮陵会」＝「神奈川大学」の認識と考えます。この目標を達成するには、これから社会で活躍していく現役の学生諸氏に宮陵会の存在をアピールしていく必要があるものと思っております。大学教員として日々学生に接しておりますが、体育会を含めた課外活動団体や奨学金等で支援を受けたことのある学生以外には、残念ながら宮陵会の存在をあまり知らないのが現状です。これまでに事業委員会では、神大フェスタ(横浜キャンプ)はもちろんのこと、スポーツ大会や新入生歓迎イベント(湘南ひらつかキャンプ)において学生の活動を支援して参りましたが、宮陵会への認識を深めるためにはより多くの学生の興味を引く新たな行事の開催・支援が必要と考えます。例えば、著名人を講師に迎えた講演会や各地域宮陵会との懇親会などの企画を現在思案中です。新米の理事ではありますが、宮陵会ならびに大学の継続的發展に尽力してまいりたいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。

本部だより

会議予定等

理事会 平成26年1月25日(土) 3月8日(土)

本部事務局人事

社団法人の移行に伴う諸業務を担当致しました田口世志男事務長取扱が、11月末日で退職しました。

地域組織新代表者紹介

ヨット部OB宮陵会 53経 花垣 博之  
福岡宮陵会 63英 松尾 直子  
三十路宮陵会 30経 奥山 勇  
南足柄宮陵会 45建 山本 俊雄  
空手部OB会 42経 藤井 洋

ご当選おめでとうございます。

亀山 統様(41応化) 石巻市長  
再選 25年4月  
本田 敏秋様(45法) 遠野市長  
3選(旧遠野市含む4回目) 25年10月

叙勲

瑞宝中綬章を受章されました。  
橋本 正俊氏(41法)  
旭日双光章を受章されました。  
山口 秀雄氏(41経)

訃報

謹んでお悔やみ申し上げます。  
高田 至康殿(22電) 平成25年4月28日  
元香川支部長

田中 嘉人殿(33経) 平成25年7月27日  
元代議員・体育振興委員会副委員長・  
陸上競技部OB会副会長

地域組織だより

今後の総会開催予定  
平成26年1月3日(土)  
香川総会  
平塚総会

会費納入のお願い

会費の納入につきましては、会員の皆様  
に8月に宮陵会報第96号の送付に合わせ、  
「会費の納入について(お願い)」を同封さ  
せていただいております。平成25年度に会  
費の納入期限を迎える方、会費未納の方  
は、「会費納入要領」によりご選択のうえ、

平成26年3月31日までにご納入いただきま  
すよう、重ねてお願い申し上げます。  
なお、神奈川大学宮陵会は、「正会員の  
中から社員を選出するための選挙を行い、  
当該選挙により選出された者を任期付きの  
社員とする。」いわゆる代議員制を採用し  
ております。平成26年8月選挙公示、平成  
27年1月選挙を予定しております。代議員  
選挙の選挙権、被選挙権は、正会員に与え  
られます。正会員の判断基準日は4月1日  
となっております。平成26年4月1日に正会員  
の方に平成26年度実施の代議員選挙の選挙  
権、被選挙権が与えられますので、ご注意  
ください。

(参考)

正会員の取扱いについて(2013年4  
月発行 会誌宮陵第62号より)  
1. 正会員の判断基準につきまして、以下  
の取扱いとなります。(定款第5条第3  
項)

① 判断基準日 4月1日

② 判断基準日に住所が判明している会員  
判断基準日に会費を納入している会員

③ 会費の納入につきまして、以下の取扱  
いとなります。

④ その年度に未納になる会員並びに会  
費を滞納されている会員に今年度分と  
して納付期限を年度末3月31日として  
会費を請求させていただきます。

⑤ 納付期限までに納入していただいた  
場合、翌年度4月1日(納付期限の翌  
日)の正会員の判断基準は、会費が納  
入されている会員となり正会員として  
取扱います。

⑥ 納付期限までに納付されない場合に  
は、翌年度4月1日(納付期限の翌日)  
には、会費が未納となり、普通会员と  
して取扱います。

⑦ 納付期限を過ぎて、翌年度に納付さ  
れた場合には、翌年度の会費の納入と  
して取扱いますので、翌年度は普通会  
員となり、翌々年度は、正会員となり  
ます。

⑧ 準会員費を納入されている卒業生  
は、翌年度4月1日に基本会費を納入  
されたものとしますが、翌年度から、  
正会員として取扱います。

発想を転換し魅力溢れる宮陵会活動をめざして世代交代

福岡宮陵会は、初代支部長の妻鳥正甫氏(昭和10年法卒)が33年間務められ、二代目支部長は、持永恕氏(16年12月商卒)が平成8年6月までの15年間務められました。第三代支部長は、津田滋氏(39年電気卒)が本年7月まで17年間を務められてきました。そして今回大きく発想を転換してヤング世代へ交代することになりました。

総会では会則の変更により名称を神奈川大学福岡宮陵会と改め、あわせて役員の変更を行い女性会長である松尾直子さん(63英文卒)が誕生しました。なお、歴史ある九州ブロック会の議長は、津田滋氏がブロック会議で再選され継続してその任にあたります。

女性会長が誕生するまでの支部活動でたいへんご苦労をされてきた津田支部長は、つぎのように述懐されております。私が前支部長のもとで事務局長を務めている時代から、特に福岡は土地柄いわゆる転勤族のメッカでありヤング層が定着化しない事が大きな課題でした。近年、支部総会への参加者が激減して

きた背景に会員の高齢化さらに前述の若い世代の参加意識の低さが同窓会離れとなってきました。これらを改善するために総会の開催時間を昼間に移すなり、若年層の参加を促すため参加費を廉価にするなど、いろいろと試行錯誤しながら活動してきましたが、なかなかうまくいきません。大学との連携で実現した本年5月の吹奏楽部福岡特別公演については、全会員へ案内状を送付して同窓会組織をPRしてきました。初めて会合に参加してくれた方もいましたが、支部活動への参加を促すまでには至りませんでした。しかしながら大いにPRされたこと

が今後に期待されると思っております。このような時ではありましたが、思い切った世代交代をしてヤング層の自由な発想を取り入れることにしました。その第1弾として「ふくこいアジア祭り…神奈川大学福岡応援隊」のデビューです。横浜では皆様にホームカミングデーでご披露させていただきました。

一方、大役を仰せつかった松尾直子さんは、これからの会の運営について、フェイスブックを利用して神大卒業生の仲間意識を高め、若い会員と先輩諸氏との連携を保ちつつ仲間を紹介しあいながら会員の輪を広げていきたいと考えています。事務局からの通知などの作業はフェイスブックで呼びかけて集まってくれた方たちで行いました。堅苦しくない気軽に集まる会を何度か開きこの方たちと幹事会的に行うようにしています。その様な話の中で実施したボーリング大会は、シニア会員も若手と共に楽しめました。昨年若手の会員と企画して実施した「ふくこいアジア祭り」への参加も実現して思いっきり楽しんでできました。「神大ふくこい踊り」

で毎年祭りに参加しますので、先輩の方々も舞台で神奈川大学の職を一緒に振るなど参加していただきたいと思っています。博多には在任者だけでなく転勤してきている卒業生も多いと思いますから、これからも神奈川大学をPRしていきたい。と抱負を語ってくれました。

このように歴史ある地域組織が発想を転換し現状打破へのチャレンジは素晴らしいことです。これらの取り組みが支部活性化の起爆剤となり、延いては会勢拡大へ結び付けばと期待されています。(文責 平能 孝一)



松尾直子さんと津田滋氏

# 準会員 NEWS

## 齋藤 悠選手 第26回ユニバーシアード冬季大会 ショートトラックスピードスケート出場決定



として名前が呼ばれたときは、嬉しかったと同時にとにかく安心した。」と今大会を回想してくれた。

齋藤選手とスケートとの出会いは小学校1年次。本学スケート部スピード部門の今井監督が指導する相模原SSCというスケートのクラブチームを見学した際に、今井監督のご子息の姿があった。今井選手は、日本代表として様々な大会に出選されておられ、当時今井選手が着ていたユニフォームに憧れ、「いつか自分も日本代表のユニフォームを着たい」という強い思いから相模原SSCの入団を決意したという。齋藤選手の才能は幼少時代から花開き、小・中学生の頃から全日本大会で優勝するなどの経験があり、各世代のトップレベルの選手の一員として戦ってきた。そんな齋藤選手も世界大会に出場するのは今回が初めての経験となる。「世界には自分よりも強い選手はたくさんいる。念願の世界大会なので挑戦者として強気で挑みたい。」と大会の意気込みを語ってくれた。

本学スケート部スピード部門所属の齋藤悠選手(人間科学部・2年)が今年の12月11日(水)〜21日(土)にイタリアのトリエンティーノで開催される、第26回ユニバーシアード冬季大会においてショートトラックスピードスケートの日本代表として選出された。

ユニバーシアードとは、国際大学スポーツ連盟が主催する世界の学生の競技大会のことです。別名「学生のオリンピック」とも呼ばれている。2年に1度開催されるスポーツの祭典ユニバーシアードに出場するためには、2013年10月12日(土)〜13日(日)に行われた選考会で結果を出さなければならなかった。齋藤選手はこの選考会で、5000m3位、10000m優勝、15000m2位という素晴らしい戦績を収め、見事男女ともに5名ずつという狭き門を突破し、日本代表の座を射止めたのだ。「コンディションがとても良く、自信はあった。閉会式でユニバーシアード日本代表者

はオリンピックという大舞台に立ちたいという大きな目標を持っている。常に一つ上の高みを目指しながら、世界の舞台へと羽

## 弘岡正樹選手 アジアユースパラ競技大会マレーシア2013 100m・200m・400mの3種目で金メダル獲得

10月26日(土)〜30日(水)にかけてマレーシアのクアラルンプールで開催されたアジアユースパラ競技大会マレーシア2013において弘岡正樹選手(人間科学部1年)が3輪の車椅子を使用する陸上短距離部門100m・200m・400mに日本代表として出場し、見事3種目とも金メダルを獲得した。

弘岡選手と陸上との出会いは小学5年生に遡る。先天性の脳性麻痺を患い、手足にハンデがある状態だが、両親がスポーツ好きということもあり、弘岡選手も幼少の頃からスポーツ好きであったという。当初は水泳やバスケットに励んでいたが、長く興味を持っていない。その中、理学療法士から競技用の3輪の車椅子「レーサー」を使用する陸上競技を薦められた。最初は腕への負担が大きく、真っ直ぐ走ることにすらできなかったが、持ち前の負けず嫌いを発揮し、最終的にはクラスの誰よりも速く走れるようになり、競技を続ける中で達成感と爽快感を感じたという。「陸上で見る迫力と走っている時の爽快感が魅力です。」と弘岡選手は目を輝かせて言う。そこから陸上の魅力にはまり込み、弛まぬ努力の甲斐もあって日本代表に選出されるまでの選手となった。

今回の大会で3度目の世界挑戦(中学3年生時・東京2009アジアユースパラゲームズ、高校1年次・2010年 Athletics World Championship ※ニューージーランドで行われた陸上競技世界大会)である弘岡選手に日本代表選手として大会に臨むことに関し、プレッシャーを感じるかと尋ねたところ、「特別な意識はないです。いつも通りやるだけです」と力強い言葉をもらった。その言葉の通り、他大学のトラッ

ばたいていく齋藤選手の今後に期待したい。(編集委員 長田いづみ)

クや一般の陸上競技場を主な練習場とし、父親の茂樹さんと週4回、1日2時間のトレーニングを欠かさず行っている。強さの秘訣がこのトレーニングにある。「疲れたら休むが、やるときは集中して一気に自分を追い込む」と弘岡選手が言う通り、常に質の高いトレーニングを行い、日々成長しようとする姿勢が感じ取れる。日々の努力の成果がアジアユースパラ競技大会での金メダルにつながったのである。

今後の目標は3年後のブラジルのリオで行われるオリンピックへの出場、そこで結果を残し、東京オリンピックに出場することだという。「ブラジルはあくまで通過点。東京オリンピックでメダルを取りたい」と弾ける笑顔と陽気さで応えてくれた弘岡選手の今後の活躍に目が離せない。

(編集委員 大野 洋樹)





石積学長を囲んで

**第90回記念大会**  
**東京箱根間往復**  
**大学駅伝競走予選会**  
**応援記**

**夢へのキップを  
手に入れた**

永田 晴彦 (58 賢卒)

10月19日、陸上自衛隊立川駐屯地をスタートし、立川市街地を抜け昭和記念公園をゴールとする、箱根駅伝予選会が行われた。

今回は90回の記念大会、3校増で上位13校が本選へ出場できる。インカレポイントも採用されず、学連選抜も無い、増枠だ。応援の打合せ前までは多分、通過できるだろうと、甘く考えていた。ところが、エントリーを見て、びつくり1年生3名が入り、レギュラー格の上級生が、3人も外れているのだ。選手育成型の神大が、1年生起用とは、怪我人が出たのだろうか。チームは厳しい状況かもしれない。6月全日本大学駅伝予選落ち、後半失速した事を、思い出し、不安が募り焦った。でもここは、予選を通過するしかない。1年生はチャンスを貰い、レギュラーは調整できるんだ。しかも、1年生は、大化けするかも知れないぞと、先輩に助言をされ、気持ちを切り替え、応援の打合せを終えた。

前回よりも、少しでも進んだ応援を目標とし、立川に宿泊し翌日の予選会に備えた。昭和記念公園前に集合、OBは他大学よりいち早く、学生はバス3台でなんと120名もの到着だ。応援、幟の数、熱気は間違いない、過去最高だ。宮陵会、学生、大学教職員と、ひととき大きな応援団ができた。いよいよスタート、手塚理事の朝礼、応援区間の人員配置の指示が終わり、先発隊はスタート地点へ、後発隊と私は、17kmの集中応援ポイントへ向かった。9時35分選手がスタートを切った直後、今から移動すれば、17km地点に10時前には着く。応援一番乗りを目指し急いだ。応援ポイントに近づくと、青色の幟の集団が見える。もしや神大応援団？なんと、学生を中心に神大の幟が既にコース両脇にびっしり並んでいる。他大学はまだ、来ていない。壮観だ。一番ゴール寄りに幟を立て、プラウドブルーのラインを眺め、少し胸を張った。ある大学のOB達が、神大の幟の前を通る時、今回の応援は、神大が一番凄い、他大学を圧倒していると話しているのが聞こえた。ウインドブレーカーの背中文字で、この大学の卒業生か、すぐ分かった。なんと、我々が予選会の応援を始めた時、手本にし

た名門校だったのだ。よくぞここまでと、ジーンときてしまった。もう予選会を通過するしかない、このメンバーで本選も応援したいと心から思った。序盤5km神大通過13位の情報が入り、少し慌てたが、後半の追い上げに期待した。

程なく10km通過10位の情報が入ったが、後続との差が余り無い、油断はできない。15km通過は7位。目の前17kmをずっと神大トップの、柿原、我那覇選手が、山梨学院の選手と日本人2位争いをしながら、物凄いスピードで走って行った。後続の神大選手も崩れながらも集団を形成し、比較的、前の位置で戦っている。ゴール手前の一番苦しい地点、神大応援団も必死で声援し、選手の背中を押した。最後の大学が走り終えてから、ゴールであるみんなの原っぱへ向かった。レースは手ごたえはあった。

10名通過順位6位、緊張感はあったが、周囲からは何となく安堵の表情が感じられた。いよいよ結果発表、神奈川大学の名前が4位に呼ばれると、一斉に歓喜の声が上がった。4年連続45回目の箱根駅伝への出場を決めた。夢への切符を手に入れたのだ。総合タイムは10時間7分32秒、前回予選より4分近く早く、設定タイム8分を切り、前回6位も上回った。心配した1年生も全員完走、東選手はチーム6番でゴールし順位を押し上げた。得意の集団走、後半上げて行く走りも健在、エースの育成も順調だ。何より1年生を3人起用しての通過は収穫、今後につながると思う。

数年前、一本の襷、少数の応援で始めた応援が大きな輪になり、立派な応援もで



きた。

しかし本選の応援に臨むには、まだ幟が足りない、人手が足りない。箱根駅伝は、一本の襷を繋いで、217.9kmを10人で走る戦いだ。襷は絆。我々卒業生にとっては、母校と結ぶ絆、絆だと思ふ。神大駅伝チームの魅力は、全員駅伝にある。実際に走る選手を、控え選手、部員達、神大をこよなく愛して応援してくださる方々が支え、心を一体化し走る。素晴らしい伝統であり大切にしたいと思ふ。神大ならではのものが、他大学とは少し違うと感じる。駅伝は校風が出ると言われるが、応援にも間違いなくそれが表れると思う。

チームに派手さは無いが、泥臭くひたむきに頑張る姿は好感が持てる。我々も温かく愛される応援を目指して行きたい。がんばれ負けるな神大、貫け伝統の全員駅伝。神大も、我々もまだまだ、こんなもんじゃないと感じている。それならすぐに始めよう、熱い応援を。本選は卒業生が力を合わせ、心を一にし頑張る時。更に進んだ応援を誓い、想いを入れ全員で襷を繋いで行きたい。選手達にプッシュャーを与える事無く、走る勇気と力を与えたい。



清水善正さん(45歳卒)卒業後初めて来校されました。新しい建物が多くなっていてビックリしました。在学中は卓球部で汗を流していました。



田中美紅さん(H25年国文卒)三重県の出身ですが、今春から羽田空港で働いています。伊勢エビでした。



石田順夫さん(45歳卒)学生時代は応援指導部に所属していました。



港南区宮陵会の皆さん  
フェスタ見学会これから専門学校の校舎跡地にある銅像を見学して西園境之谷公園へ散策に出かけます。



中村茂夫さん(33歳卒)正野崎研究室「孫が来る、入学予定。横須賀から家族で見学に来ました。」



丹羽セシの皆さん



押井隆太さん(H10法卒)ご夫妻二人とも卒業生  
ご主人は大田区議会議員として活躍中。

11月2日(土)  
3日(日)

# 神大フェスタ

第15回神大フェスタは、11月2日(土)、3日(日)は横浜キャンパスに於いて「15一会」ーいちごいちえーのテーマで開催されました。今年で第15回目を迎えるキャンパスでお会いする様々な方たちとの一期一会を大切にしたいとの気持ちを表わしています。そしてこのテーマのもと、第1回から受け継がれている「学生主体」「地域密着」のコンセプトは変わらず、最高学府における学術的・文化的祭典を目指しています。宮陵会は、今年も「卒業生憩いのコーナー」テントを出店して久しぶりに来校される卒業生をお迎えしました。

10月の箱根駅伝予選会のビデオ上映などで楽しんでいただき卒業生たちと昔話などしながら楽しく交流の輪を広げました。



神大フェスタ会場の風景  
5号館6号館前の出店では昼時は身動きできないほどの盛況でした。



神大フェスタ 入場門のデコレーション  
一日目の午後は小雨もはぶつく天気でしたが多くの来場者で盛況でした。



右：杉山香織さん(H24化卒)  
左：田中陽子さん(H24化卒)  
「ピンゴを是非食べて！」



高橋健さん(H18国文卒)  
「毎年ゲームサークルの『クロムレック』の後援に差し入れています。」



平塚祭実行委員長 林秀樹さん(国文3年)「4月から6か月間皆さんに楽しんでいただくようにスツッパー丸どなって準備してきました。」



毛受雄一さん(H16国文卒)  
「毎年平塚祭を楽しんでいます。」

平成25年度平塚祭は、台風の接近で2日間のところ10月27日(日)の1日だけ、湘南ひらつかキャンパスで開催されました。

今年のテーマは、来てくださった皆様に楽しんでいただけるよう「セレモニー」とし、平塚祭実行委員会では様々な企画を準備しました。当日は台風一過の快晴の中、ビンゴ大会・模擬店コンテスト・サークル★タックル・高校生バンドコンテスト等のイベントやトークショーとして「川越達也シェフ」が出演しました。また、サークルや研究室の模擬店等が多数出店し、大いに盛り上がりました。

宮陵会では、大学と協力して卒業生が気軽に立ち寄れるようテントを設営し、箱根駅伝予選会の映像を流したり、立ち寄ってくださった卒業生に記念品のボールペンを配る等の活動をしました。

平塚祭実行委員長と卒業生の一言をご紹介します。

# 平塚祭 10月27日(日)

永田雅人さん(H9化卒)  
「学生時代は毎年平塚祭に参加していました。卒業後は毎年来て楽しんでます。」



特設テントで卒業生をお迎えしました。10月19日の箱根駅伝予選会の成績と映像を流しましたのでたくさんの方が足を止めて見てくださいました。



左：佐藤純さん(H23化卒)  
右：藤澤未來さん(国経4)  
「藤澤さんの最後の平塚祭についてきました。」



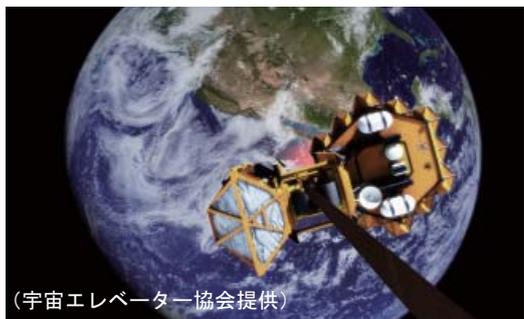
阿部紘士さん(H25国経卒)  
「仕事、楽しくやっています。」



# 工学部 江上正教授提案課題 「神奈川県大学発・政策提案制度」に採択される

2050年に完成を目指す実現可能な夢の技術として近年、宇宙エレベーターに対する期待と関心が高まっていますが、この分野において基礎研究と開発に携わっておられる工学部機械工学科の江上正教授をリーダーとするチームの提案課題が8月19日に神奈川県と県内の大学による協働プロジェクトを推進するための施策「神奈川県大学発・政策提案制度」に採択され、最優秀提案として知事から表彰を受けました。

宇宙エレベーターとは何か、また今回採択された政策提案のことについて江上教授にお話を伺いました。



(宇宙エレベーター協会提供)

宇宙エレベーターは地球上から宇宙空間に向けて10万キロメートルの長さのケーブルを張り、高度約3万6,000キロメートルの静止軌道上の宇宙ステーションまで自らの動力でケーブルを伝って上り下りする宇宙輸送システムです。江上教授によれば「宇宙ロケットのように多量の燃料を消費することも、搭乗者が特別な訓練を受ける必要もなく、安全な大量輸送が可能な宇宙エレベーターは、本格的な宇宙開発を可能とする低コストでクリーンな画期的システムと言えます。実現すれば、用途は多岐にわたります。太陽光発電や宇宙工場等、無限の可能性が開けます。宇宙軌道上の宇宙ステーションの外側に

伸ばしたケーブルを宇宙船の射出機として使えば、地球の遠心力を利用して燃料がなくても月や火星に行くことが可能になると江上教授は指摘されます。

江上教授の研究室では宇宙エレベーターの研究開発を重ねるとともに、その成果の検証と技術力の向上を目的として、バルーンで上空から吊り下げたケーブルをクライマーと呼ばれる昇降機が往復する性能を競う大会（一般社団法人宇宙エレベーター協会主催）に出場し、優秀な成績を収めています。最近では高校生などからの参加希望が増えているため、高校生も参加できる製作の容易な軽量クライマーの競技会が企画され、6月8日、本学横浜キャンパスにおいてミニレースが実施されました。

今回採択された「宇宙エレベーターの実験機製作を通じた、夢を持ちチャレンジ精神に溢れる人材づくりと地域産業との人材交流プロジェクト」と題する提案は、こうした経験と実績を踏まえたもので、実験機の製作ならびに競技会等の開催を通して県や企業、宇宙エレベーター協会との連携のもとに次代を担う人材である県下の高校生ものづくり教育とチャレンジ精神の涵養を目指します。同時にこのプロジェクトの遂行にあたっては、県内の中小企業に技術支援を依頼し、このプロジェクトを契機に地域産業との人材交流が進み、高大連携による人材育成にとどまらず、県の政策に盛り込まれることにより、このプロジェクトが産学連携にも含めた、技術革新を生み出すための産官学協働によるより幅広い活動の場へと展開することを視野に入れています。さらに高校生を対象とした本プロジェクトは、入学志願者の増加と優秀な人材の確保につながることを期待されます。

多くの卒業生のご支援、ご協力は、人材育成ならびに研究開発を目的としたプロジェクトの大きな支えとなると思われます。

(編集委員 川口 好孝)

## 東日本大震災 — 気仙沼大島資料保全プロジェクト —

平成25年10月11日～14日、神奈川大学日本常民文化研究所と大学院歴史民俗資料学研究所などによる宮城県気仙沼市の大島漁業協同組合所蔵資料の三回目となる保全活動が行なわれた。これは、東日本大震災によって水損した同資料を修復・保存し、大島に建設予定の収蔵庫へ収納するという震災復興に向けたプロジェクトである。



被災した資料を前にして—平成23年5月 (写真提供・神奈川大学日本常民文化研究所)

震災の爪痕が今なお残るなか、本学OBであり、プロジェクトを担った田上繁教授に話しを伺った。

平成23年3月11日、大震災が東北地方を襲った。報道で状況が伝えられると、気仙沼と永年資料調査などを通じて交流のあった常民研

の教員・職員は、お見舞いに同地を訪れた。安否の知らせに胸をなで下ろすのもつかの間、その惨状を目の当たりにしたとき、歴史に携わり、資料を扱う我々にとってできることはあるのか。そうした想いが湧いたという。資料の保全活動を行なうことになる大島漁協は、100年以上の歴史を持つ。設立以来連続と保存してきた貴重な資料が津波によってひどく水損したため、漁協の要請に応じ、常民研が資料レスキューに乗り出したのである。田上教授は、本学に移管される前の常民研時代から培われた気仙沼との永い関係、また漁業史・漁協史・地域史に光をあてるその資料群の価値など、救わなければならないその資料の重要性をまず強調する。

救出した資料は約5千点。資料レスキューの一回目は、震災直後の5月の19日間、5班に分かれて教員・職員・研究科の大学院生など総勢49名(延べ160名)が作業を行なった。津波により組合事務所に入り込んだ瓦礫、土砂などを除去し、資料の腐敗、カビの進行を防止するための応急策をこのとき施したという。しかし、応急手当だけでは含んだ海水がこれから資料にどのような変化を起こすか分からない。思案の結果、資料を独立行政法人奈良文化財研究所へ送り、真空凍結乾燥機による乾燥処理に託すこととなった。奈文研は古代の木簡に見られるような貴重な埋蔵文化財に対する処理などの知識をもつ。奈文研の協力を得るに至るまでの様々な支援と多くの方々からいただいた助言、そしてその労を惜しまない院生をはじめとする参加者個々人の働きは、非常時ながら頼もしく、感謝するものであったと教授は語る。

資料レスキューの二回目は、奈文研での整理活動である。大島での収蔵に向けて資料の粗目録を作成した。現在、資料は乾燥処理を受け、大島に戻ってきている。その大島に向き、資料の汚泥を落とすドライクリーニングなどの作業を行なったのが、今回の三回目の活動であった。

田上教授は、「これから収蔵庫を大島に建設し、“大島漁業史文庫”として救出した資料を収納する。そして資料を地域の方々など多くの人々に活用してもらいたい、それには、まだまだ継続して大島の人たちと協力していくことが必要だ。」と述べ、果ては文庫が大島文化の発信までを担う期待を込めた。最後に教授は、気仙沼での活動にあたって宿を提供された本学卒業生の尽力を指摘された。旅館を営む堺健氏は自らも被災しながら、旅館を被災者の避難場所として提供し、さらには本プロジェクトにも協力されたという。多くの宮陵会会員諸氏にこの活動を知っていただき、理解と支援を賜りたいと教授は話した。

(編集委員 齊藤 研也)